

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和7年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



テレホンサービス : 099-296-6430
(7~9月) : 099-296-6431

ホームページアドレス : <https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス : nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|--|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理, 安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期, 適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守) |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海等への汚染防止)
(養蚕, 養蜂等への危被害防止) |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

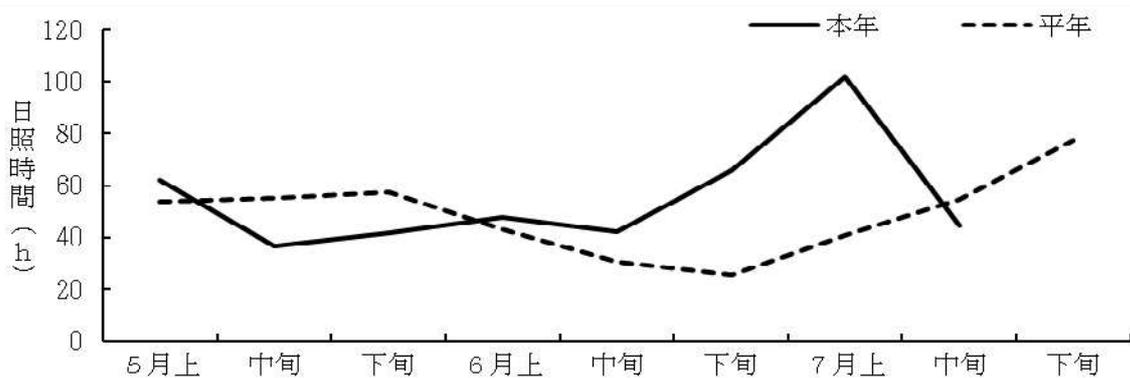
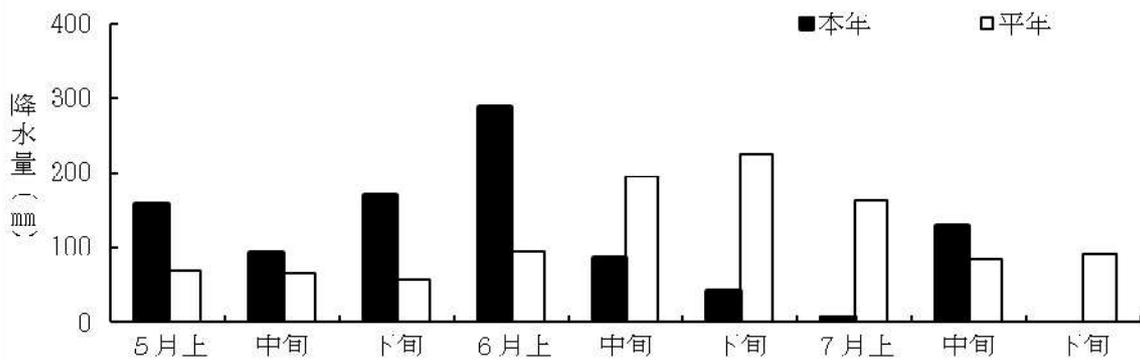
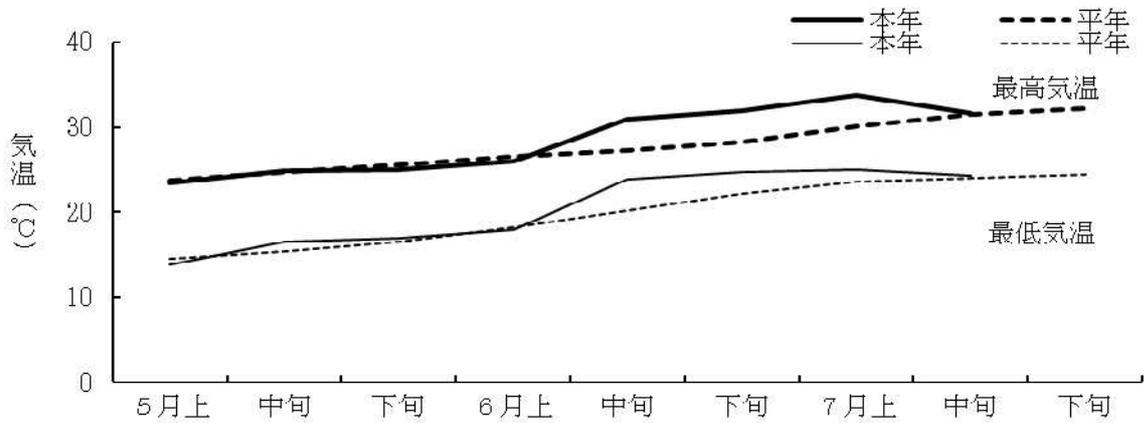
農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（7月26日から8月25日） 令和7年7月24日 鹿児島地方気象台 発表

		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	3.0	3.0	4.0	気温は九州南部はほぼ平年並、奄美地域は平年並か低い、降水量は九州南部、奄美地域ともに平年並か多い、日照時間は九州南部は平年並か少なく、奄美地域は少ない。
	奄美地方	4.0	4.0	2.0	
降水量	九州南部	2.0	4.0	4.0	
	奄美地方	2.0	4.0	4.0	
日照時間	九州南部	4.0	4.0	2.0	
	奄美地方	5.0	3.0	2.0	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	普通期水稲	葉いもち	やや少	やや少
		穂いもち	—	やや少
		紋枯病	並	並
		トビイロウンカ	やや少	やや少
		コブノメイガ	やや少	やや少
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや多	やや多
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	うどんこ病	並	並
		炭疽病	やや多	多
		ハダニ類	多	多
	サトイモ	疫病	並	やや多
		ハスモンヨトウ	多	多
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	少	少
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや少	やや少
果樹	カンキツ	かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	多	多
		”（奄美地域）	やや少	やや少
		黒点病（県本土・熊毛地域）	並	並
		”（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
”（奄美地域）	多	多		
茶樹	チャ	炭疽病	多	多
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	並	やや多
		網もち病	やや少	並
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	並	並
		カンザワハダニ	やや多	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 穂いもち：やや少
葉いもち：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少(葉いもち)

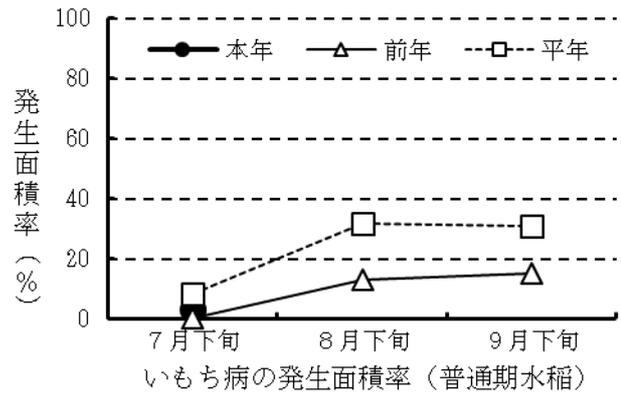
発生面積率 3% (平年 8%)

：やや低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。
常発地や葉色が濃いほ場では、穂肥の施用は控える。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

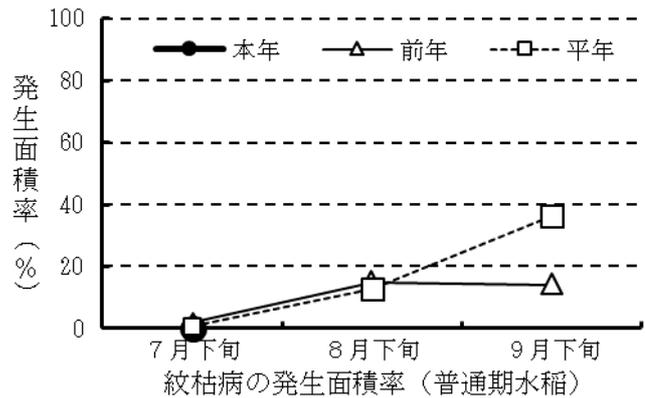
発生面積率 0% (平年 1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 今後、気温が高いことが予想されるため、被害が拡大する恐れがある。発生を確認したら、農薬防除を行う。

(イ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 紋枯病が発生している水田では、出穂後も上位部への病斑の進展を確認する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

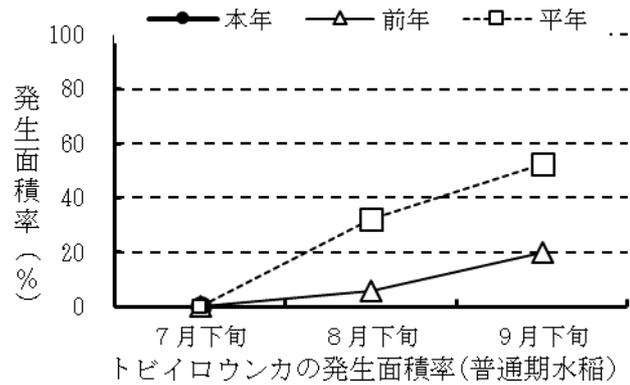
発生面積率 0% (平年 6%)

: やや低い (-)

60W水田予察灯での6月1日～7月

22日の誘殺虫数2頭 (平年 23.4頭)

: 少 (-)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 初誘殺日は金峰町の水田誘殺灯では6月22日 (平年6月20日) で、平年並であった。防除適期は6月22日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月11～14日、さつま町の水田予察灯では6月27、30日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月14～18日、18～21日と予想される (表1, 図1)。

(イ) 本虫は稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、農薬が株元に十分届くように散布する。

(4) コブノメイガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

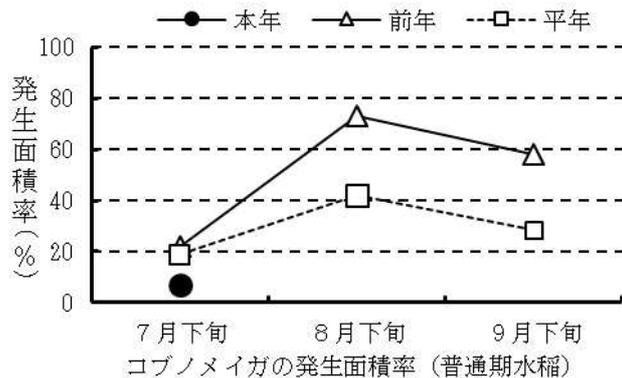
(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生面積率 7% (平年 18%)

: やや低い



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) クロラントラニリプロールを含む箱粒剤による被害抑制効果が低下しており、近年、中生、晩生品種での発生は増加傾向である。

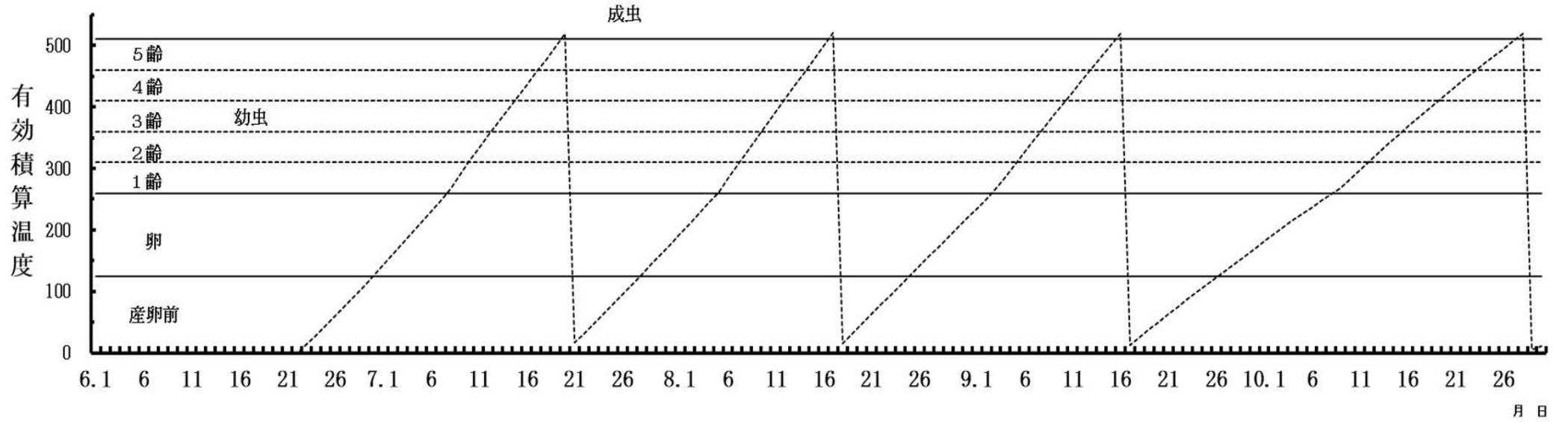
(イ) 7月11日、18日、20日の誘殺に由来する第1世代成虫の発蛾最盛日は8月11日、21日、23日頃と予測される (表1, 図1)。粒剤による防除は発蛾最盛日、粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の7日後に行う。

(ウ) 止葉を含む上位3葉への被害は収量・品質に影響するので、今後の蛾の発生が多い場合は、第2世代幼虫を対象に防除を行う。

表1 予察灯等におけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

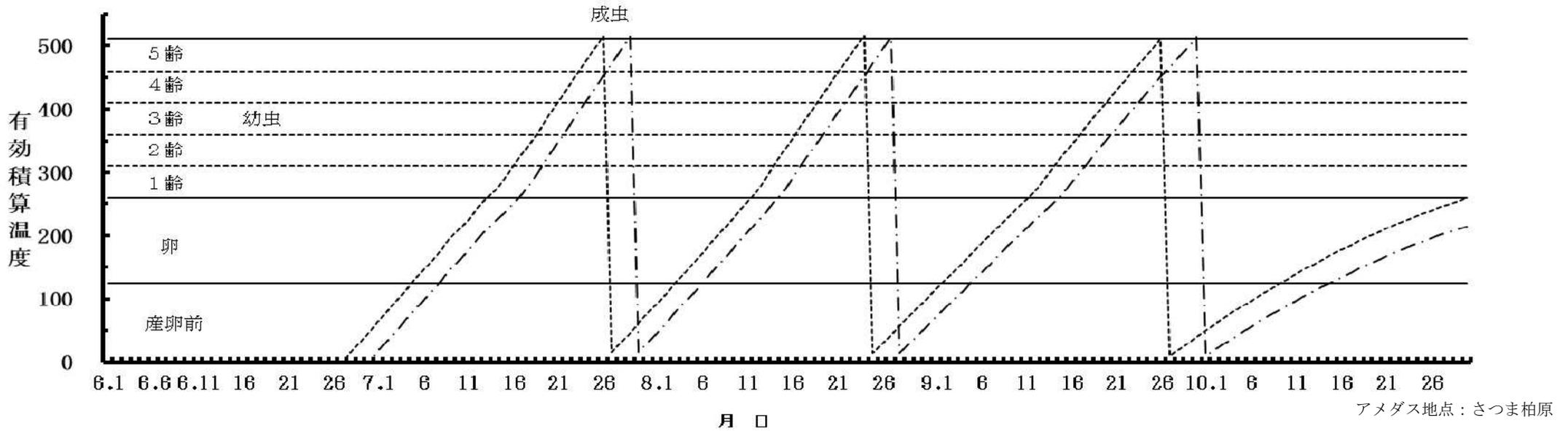
日付	60W予察灯(水田)						ジョンソントラップ			フェロモン
	南さつま市			さつま町			南さつま市			コブノメイガ
	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	
6/1	0	0	0				0	0	0	0
6/2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/3	0	0	0				0	0	0	0
6/4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
6/5	0	0	0				0	0	0	0
6/6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
6/7	0	0	0				0	0	0	1
6/8	0	0	0				0	0	0	0
6/9	6	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/10	6	0	0				1	0	0	0
6/11	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/12	0	0	0				0	0	0	0
6/13	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
6/14	2	0	1				0	0	1	0
6/15	0	0	0				0	0	5	1
6/16	0	0	0	1	0	0	1	0	3	3
6/17	2	0	0				1	0	0	1
6/18	1	0	1	13	0	1	0	0	0	1
6/19	0	0	0				0	0	0	0
6/20	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
6/21	0	0	0				0	0	0	0
6/22	1	2	1				0	0	0	0
6/23	1	0	0	2	0	0	0	0	1	1
6/24	2	0	1				0	0	0	1
6/25	1	0	4	70	0	1	0	0	1	0
6/26	3	0	0				0	0	0	0
6/27	8	0	0	55	3	0	0	0	0	0
6/28	10	0	0				0	0	0	0
6/29	0	0	0				0	0	0	1
6/30	7	0	4	7	5	0	0	0	0	0
6月計	50	2	12	152	8	4	3	0	12	12
7/1	0	0	1				0	0	0	0
7/2	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0
7/3	0	0	0				0	0	0	0
7/4	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0
7/5	0	0	0				0	0	0	0
7/6	0	0	0				0	0	0	0
7/7	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
7/8	0	0	0				0	0	0	0
7/9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/10	3	0	0				0	0	0	0
7/11	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
7/12	0	0	0				0	0	0	1
7/13	0	0	0				3	0	0	0
7/14	3	0	3	0	1	0	3	0	0	1
7/15	0	0	0				0	0	0	1
7/16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
7/17	0	0	0				0	0	0	0
7/18	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
7/19	0	0	0				0	0	0	0
7/20	0	0	0				0	0	0	6
7/21	0	0	1				0	0	1	6
7/22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
7/23	0	0	0				0	0	0	2
7/24	0	0	0				0	0	0	0
7/25	0	0	0				0	0	0	0
7/26										
7/27										
7/28										
7/29										
7/30										
7/31										
7月計	7	0	6	5	7	0	6	0	1	28
6~7月計	57	2	18	157	15	4	9	0	13	40

1. トビイロウンカ
 (1) 金峰町誘殺



アメダス地点: 加世田

(2) さつま町柏原誘殺



アメダス地点: さつま柏原

2. コブノメイガ

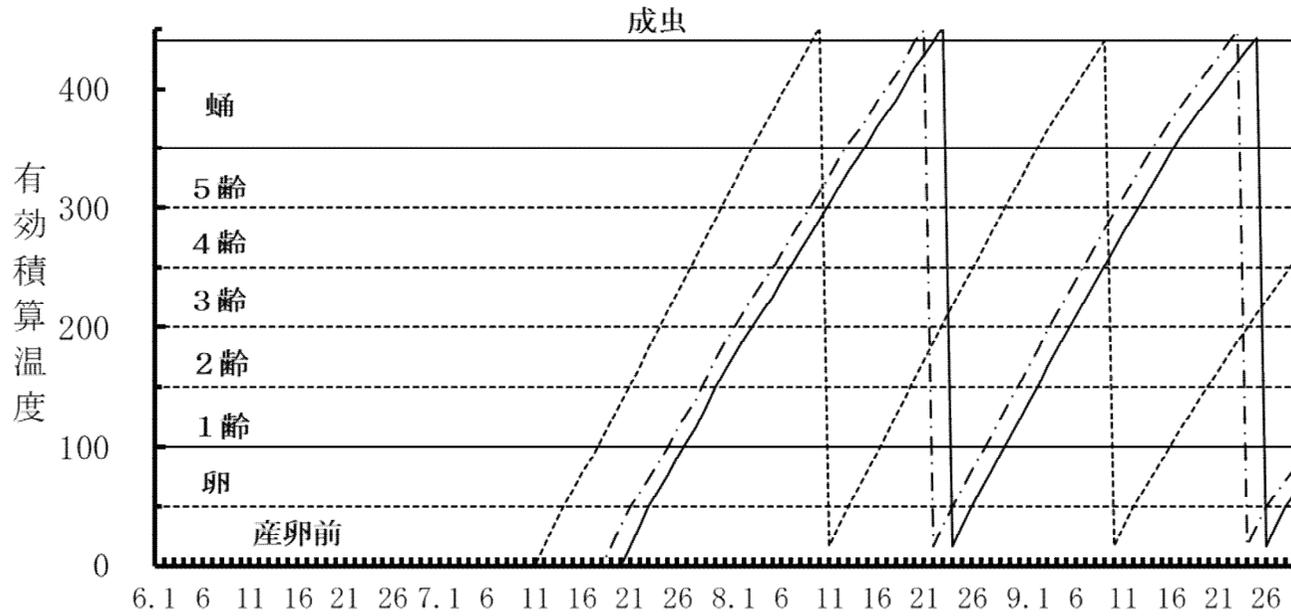


図1 トビイロウンカ、コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、加世田のアメダスポイントデータを利用した
 (7/21 まで実測値、それ以降は平年値)
 なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 30%（平成 39%）：並

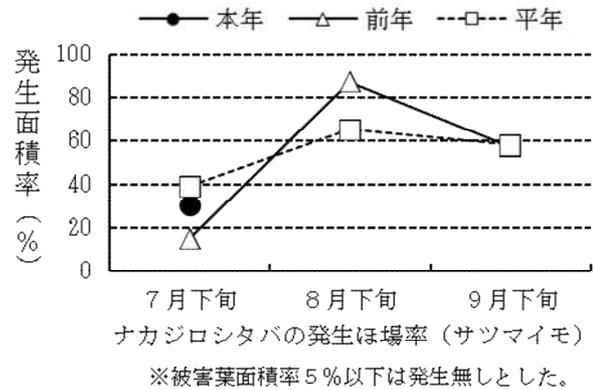
発生程度の高いほ場が認められた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 農薬散布後も幼虫の発生量が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。

(ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、防除時期を逸しないよう注意する。



防除に関する今月の留意事項



1. サツマイモ

(1) ヒルガオハモグリガ（令和6年度技術情報第27号，令和7年2月21日付参照）

ヒルガオハモグリガの発生が，県内の一部のサツマイモほ場で多発している。被害が拡大する
とほ場全体が赤茶けたように枯れあがることから，被害を確認したら，早めに防除を行う。農薬
については，令和6年度技術情報第27号を参考にしてください。

2. サトウキビ

(1) バッタ類

ア 発生状況等

(ア) 令和7年7月7～18日に調査した奄美地域における発生ほ場率は46%（平成26%）と平年
に比べて高く，徳之島では食害面積率が30%を超えるほ場も認められた。

(イ) 令和7年6月の降水量は，奄美大島では94mm（平成比25%），喜界島では78mm（同26%），
徳之島では59mm（同17%），沖永良部島では59mm（同19%），与論島では26mm（同10%），
種子島では198mm（同36%）と平年に比べて少なく，バッタ類の発生に好適な条件であった。

イ 防除上注意すべき事項

(ア) 農薬散布は，バッタ類の活動の鈍い早朝に一斉に行うのが効果的で，近隣作物へのドリフト
（飛散）に注意する。

(イ) 早期発見に努め，若齢幼虫の集団を発見したら，速やかに防除を行う。

(ウ) サトウキビほ場周辺のイネ科雑草は若齢幼虫の好適な餌となるので，除草に努める。

(エ) イネ科牧草では，幼虫の多発生が見られる場合，刈り取り回数を増やすなどして物理的防除
に努める。

(オ) ヒゲマダライナゴは卵越冬することから，サトウキビの株出しほ場では次年度対策として，
収穫後に畦間を耕うんし，卵塊を破壊する。

II. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 20%（平年 21%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

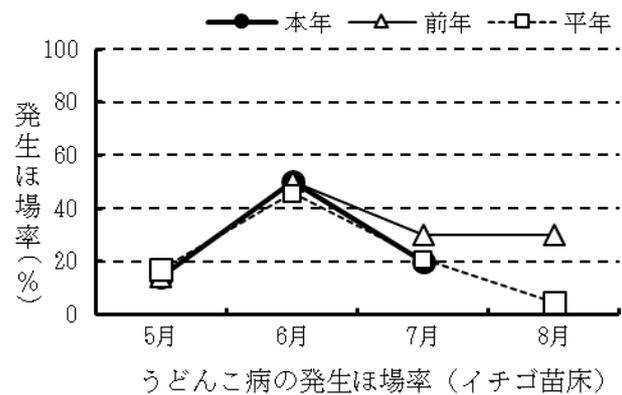
(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬液が十分かかるよう散布する。

(オ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率（イチゴ苗床）

(2) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 20%（平年 11%）

：やや高い

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

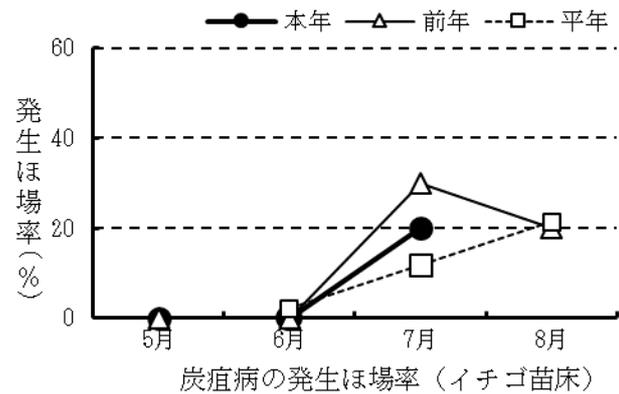
(イ) 苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

(ウ) 雨よけ、防風対策を徹底する。

(エ) 生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

(オ) 農薬による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(カ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



炭疽病の発生ほ場率（イチゴ苗床）

(3) ハダニ類 (令和7年度技術情報第10号, 令和7年7月25日付参照)



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: 多

発生ほ場率 90% (平年 30%)

: 高い

ウ 防除上注意すべき事項

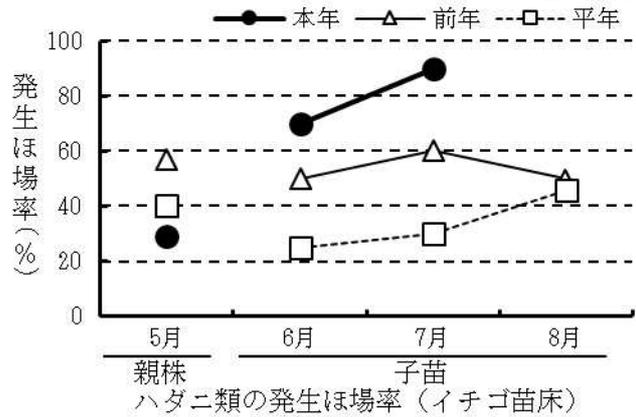
(ア) 密度が増加してからの防除は困難

なので, 早期防除に努める。農薬は

散布ムラのないように, 葉裏まで丁寧に散布する。

(イ) 農薬によっては感受性が低下しているので, 散布後は防除効果を確認する

(ウ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: 並

発生ほ場率 20% (平年 42%)

: やや低い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

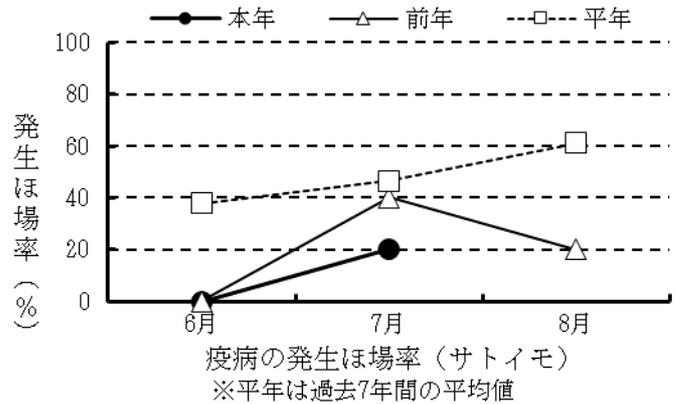
降水量: 平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため, ほ場周辺をよく見回り, 早期発見に努める。

(イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので, 発生を確認したら直ちに治療効果のある農薬を7日間隔で複数回散布し, 防除を徹底する。

(ウ) 発病茎葉は発生源となるので, 早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し, 適正に処分する。



(2) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

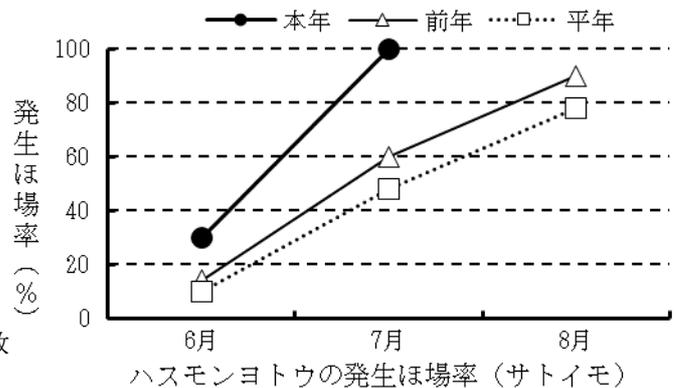
(ア) 調査結果 発生量: 多

発生ほ場率 100% (平年 49%)

: 高い

6~7月のフェロモントラップ総誘殺数

: やや多 (+)

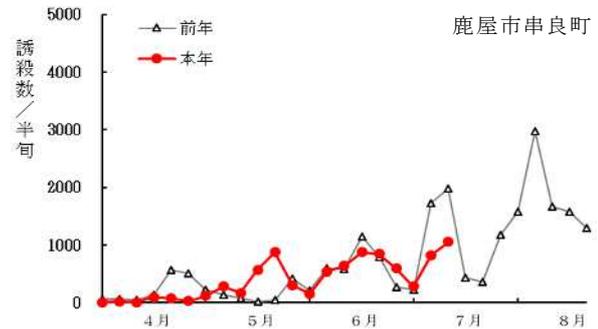
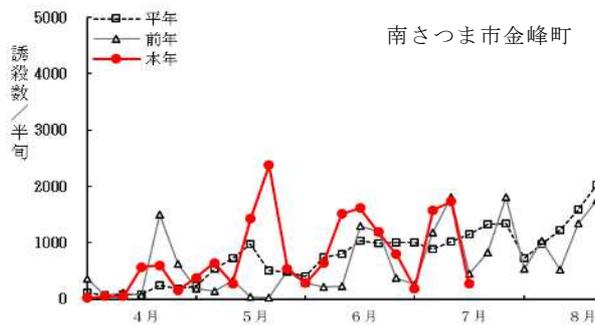


	南さつま市	鹿屋市
誘殺数 (6月1半旬～7月3半旬)	9,547頭(平年7,891頭)	5,082頭(平年ー)*

*鹿屋市は令和6年度から調査

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生の目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくくなるので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況(南さつま市, 鹿屋市)

※鹿屋市は令和6年度から調査

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 30%（平年 44%）：低い

ウ 防除上注意すべき事項

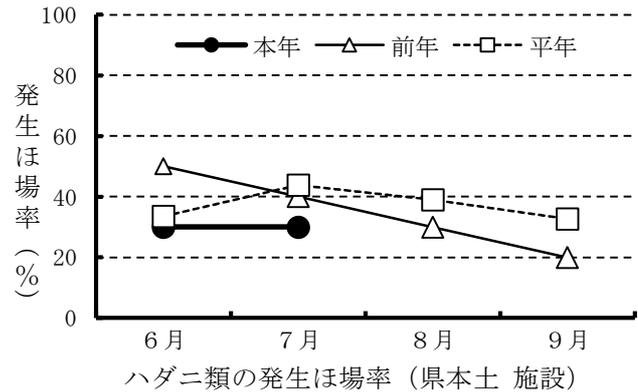
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で

スポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 30%（平年 40%）

：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握する

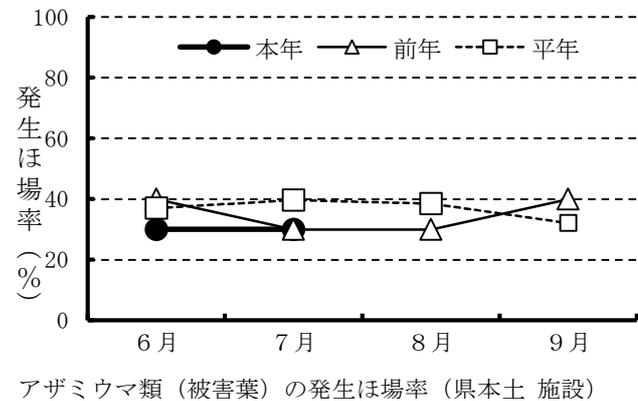
ためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

(イ) クロゲハナアザミウマは中下位葉に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） 多

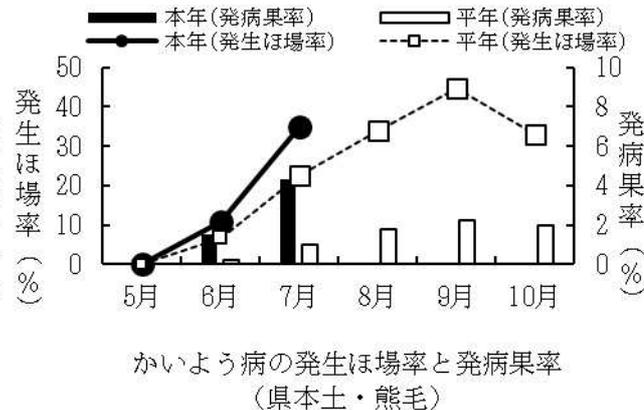
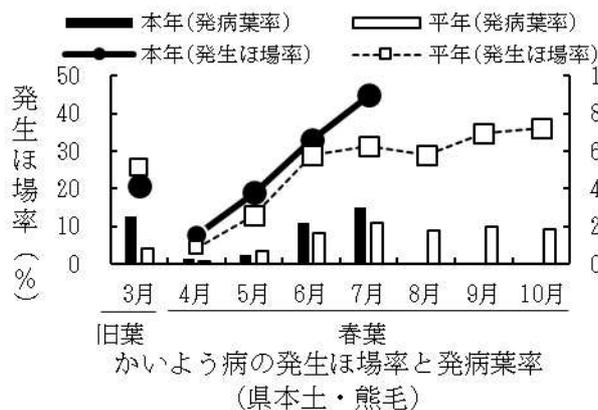
奄美地域（果実） やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	多	多
発生ほ場率	45%（平成 32%）：高い	35%（平成 23%）：やや高い
発病率	3.0%（平成 2.2%）：高い	4.3%（平成 1.0%）：高い
発生程度	—	高いほ場を認める（+）



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	0%（平成 4%）：並	0%（平成 4%）：やや低い
発病率	0%（平成 0.1%）：並	0%（平成 0.1%）：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、枝の風揺れを防止する支柱や防風網を設置して風傷の発生を軽減する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 (果実) 並

奄美地域 (果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 38% (平年 23%) : やや高い

発病果率 1.0% (平年 3.1%) : やや低い

発生程度は低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

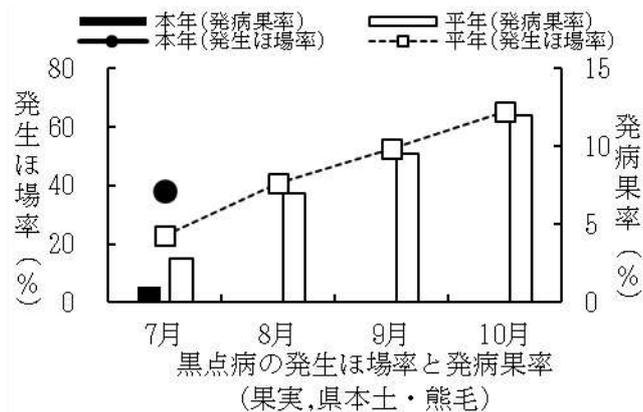
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並

発病果率 0% (平年 0.01%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多いため、薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定枝は園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 9% (平年 22%) : やや低い

寄生葉率 2.4% (平年 5%) : やや低い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：多

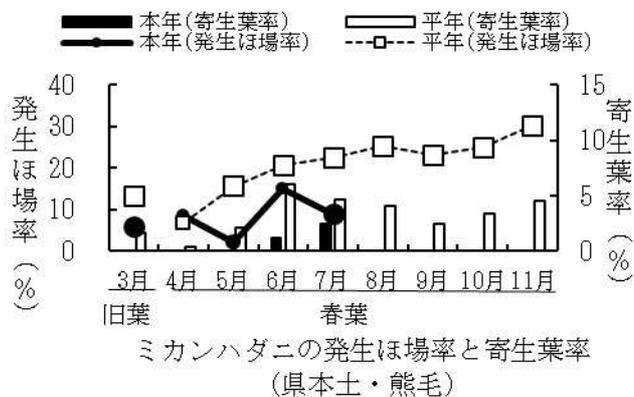
発生ほ場率 29% (平年 3%) : 高い

寄生葉率 1.7% (平年 0.02%) : 高い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。

(イ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ，ツヤアオカメムシ）

ア 予察灯での誘殺虫数は，チャバネアオカメムシは平年に比べてやや少～並，ツヤアオカメムシはやや少であった（表1，図1）。各予察灯での最新の誘殺虫数は，鹿児島県病害虫防除所ホームページを参照。

イ ヒノキ球果の口針鞘数（吸汁痕数）は，7月前期では0.02本/果（平年0.6本/果）で平年に比べて少なかった。ヒノキ球果（餌植物）から離脱する目安は25本/果であり，平年の到達時期は9月下旬であるが，夏季が高温で推移し，ヒノキ球果の成熟が早まると果樹園等へ飛来時期は早まる可能性がある。

表1 予察灯の誘殺状況（7月第1～3半旬の総誘殺虫数）

調査地点	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	7	450	1	229
いちき串木野市湊町	0	80	0	47
出水市三原町	3	1,484	7	981
鹿屋市串良町	4	17	3	42
発生量	やや少～並		やや少	

注1) 平年は2015年～2024年の10年間の平均値

注2) 予察灯の光源は，南さつま市金峰町は水銀灯100W，鹿屋市串良町は捕虫灯20W，他は捕虫灯40W

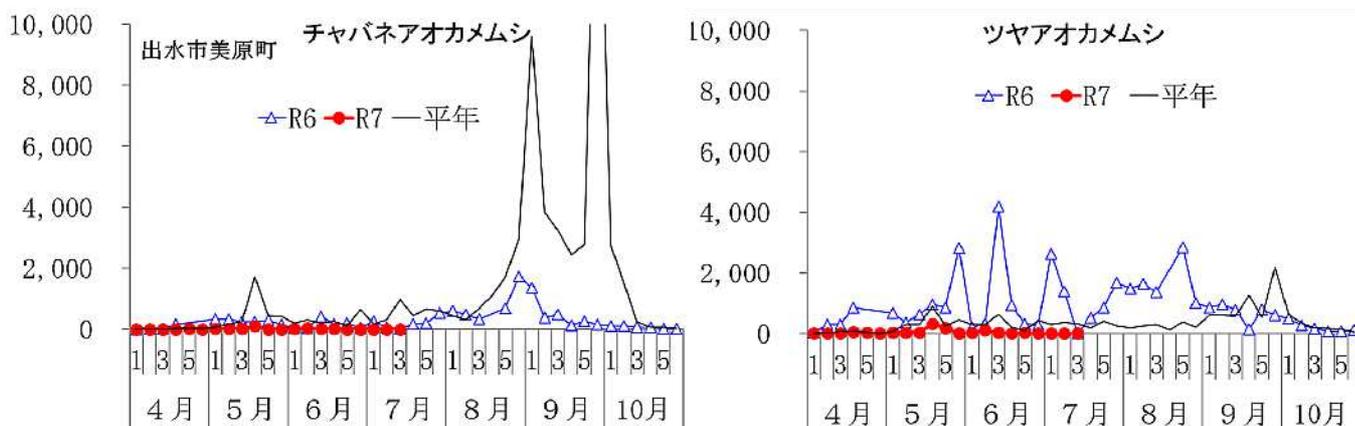


図1 出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 61% (平年 54%)

：やや高い

1 m²当り病葉 11.2 枚 (平年 6.2 枚)：多

発生程度が高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

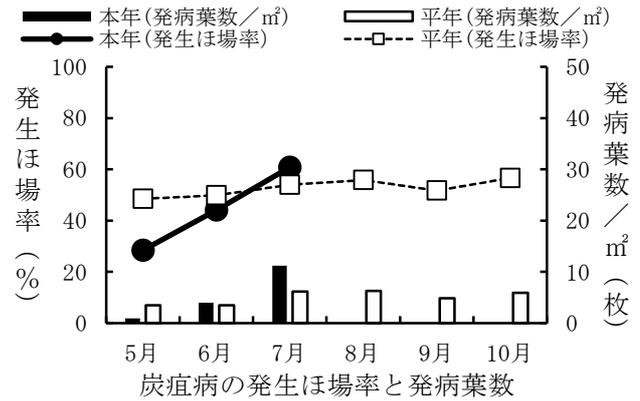
降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生源となる病葉が少なくても、秋芽生育期に降雨が続くと発生しやすい。

(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤で、3～4葉期に治療効果の高い農薬で防除する。

(ウ) 降雨が続き、防除時期が遅れた場合は3～4葉期に予防剤と治療剤を混用して防除する。



(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 (輪斑病)：並

発生ほ場率 20% (平年 20%)：並

1 m²当り病葉数 1.7 枚 (平年 1.7 枚)

：並

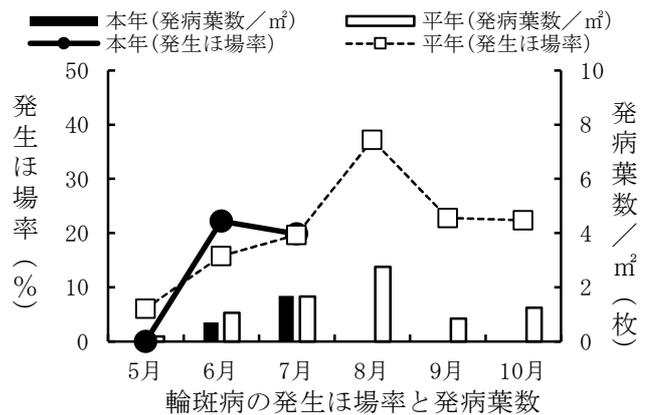
(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除を考慮する。



(3) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

(ウ) 感染時期 秋芽生育期

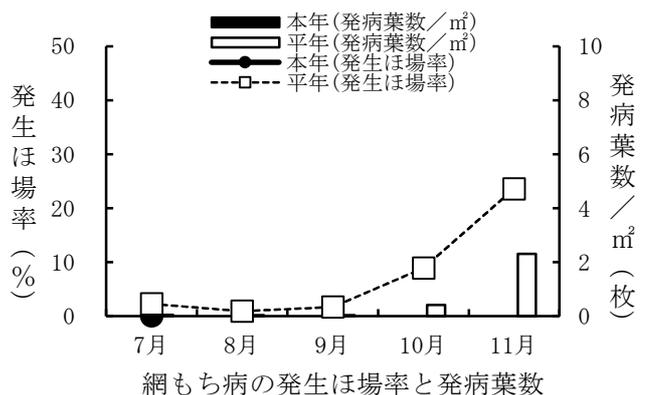
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 2%)：やや低い

1 m²当たりの病葉数 0 枚 (平年 0.04 枚)

：やや少



(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。

(イ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い「あさのか」等の品種は予防的に防除を行う。

(ウ) 更新園であっても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。

(エ) 常発園では、3～4葉期の防除に加えて、9月上旬にも銅剤等で防除する。

(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並
チャハマキ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

チャノコカクモンハマキ

チャハマキ

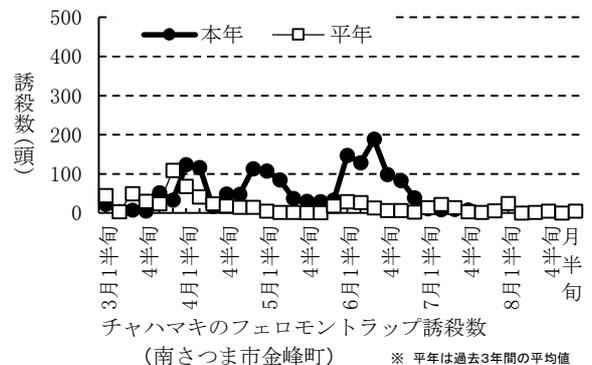
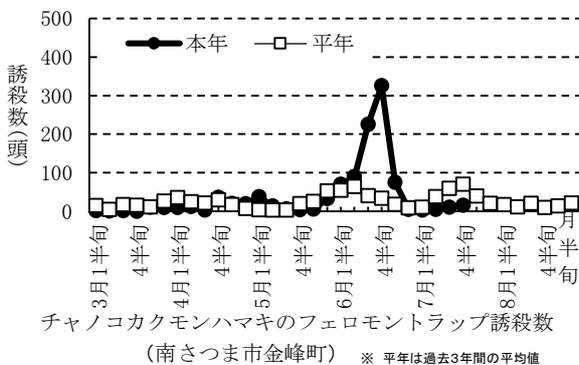
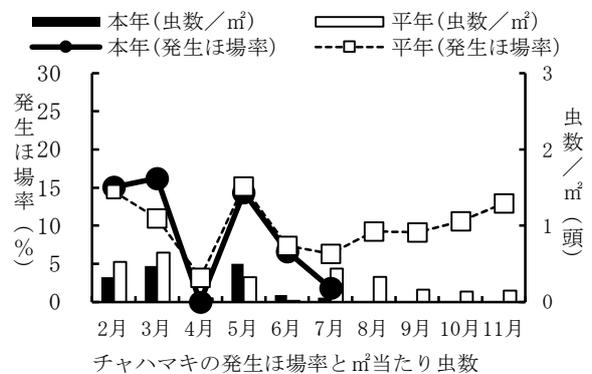
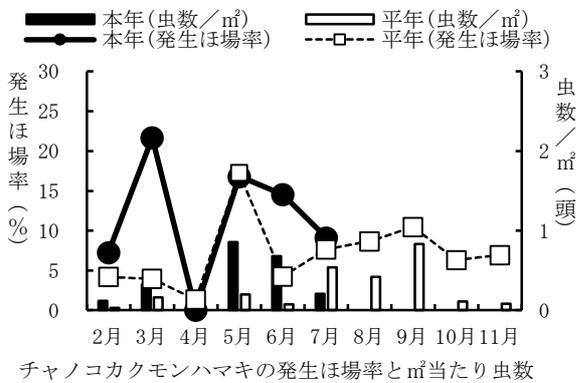
【巡回調査】

発生量	並	やや少
発生ほ場率	9% (平年8%) : 並	2% (平年6%) : やや低い
m ² あたり虫数	0.2頭 (平年0.5頭) : 並	0.06頭 (平年0.40頭) : やや少

【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】

誘殺数* (6月1半旬~7月4半旬)	825頭 (平年399頭)	718頭 (平年137頭)
--------------------	---------------	---------------

* 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2 齢期（発蛾最盛日の 10～15 日後）である。
- (ウ) 一部でジアミド系農薬に対する感受性が低下しているため、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

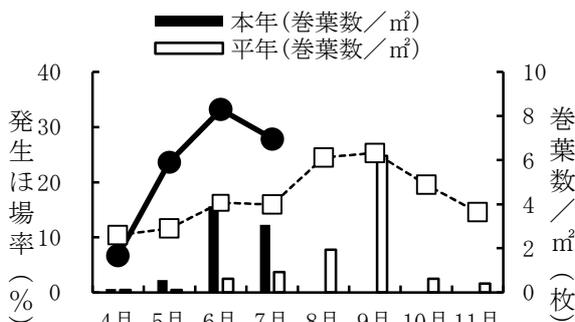
- (ア) 調査結果 発生量：多

【巡回調査】

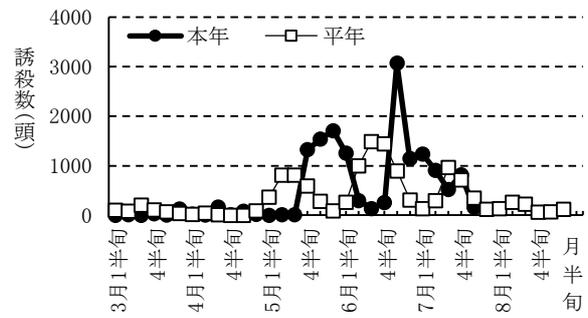
発生ほ場率 28%（平年 16%）：高い
 m²当たり巻葉数 3.1 枚（平年 0.9 枚）：多

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数（6月1半旬～7月4半旬） 8,550 頭（平年 7,517 頭） * 平年は過去3年間の平均値



チャノホソガの発生ほ場率とm²当たり巻葉数



チャノホソガのフェロモントラップ誘殺数 (南さつま市金峰町) * 平年は過去3年間の平均値

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。
- (イ) 一部で IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ，チャノキイロアザミウマ

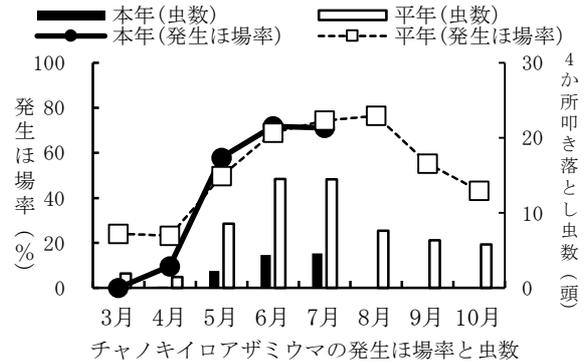
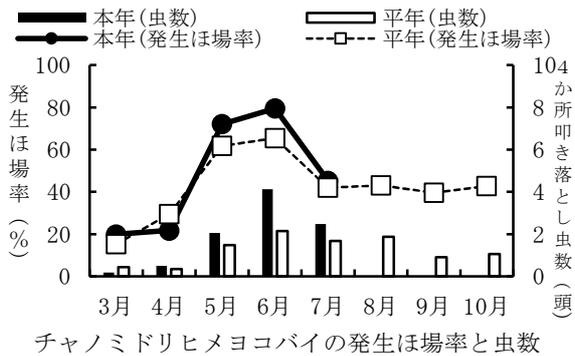
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
 チャノキイロアザミウマ 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	並
発生ほ場率	45% (平年 42%) : 並	71% (平年 74%) : 並
虫数(4か所たたき落とし)	2.5 頭(平年 1.7 頭) : やや多	4.6 頭(平年 14.5 頭) : 少
発生程度	高いほ場を認められる (+)	—



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいため秋芽の防除を徹底する。
- (イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。特に更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。

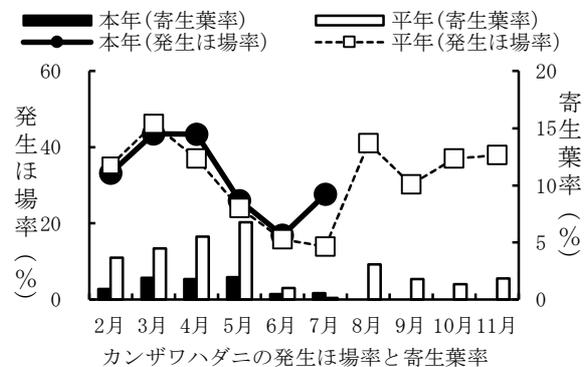
(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
 発生ほ場率 28% (平年 14%) : 高い
 寄生葉率 0.6% (平年 0.1%) : 高い
 発生程度は低い (ー)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 今後、天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。
- (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、栽培の多様化により、同一地域でも芽の生育時期や防除時期が園地により異なる。このため、農薬散布において以下の事項を遵守する。

- (1) 農薬を散布する際は、摘採前日数を遵守する。
- (2) 隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意する。
- (3) 摘採前であることを「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は、発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。